『源氏物語』における花散里の本心

― 源氏との関係から ―

鈴木 裕美子

はじめに

花散里は源氏の訪れが少ない愛人であるが、夕霧の養母や玉鬘の後見を任される等源氏から厚遇される存在として描かれている。しかし、花散里と源氏の男女関係が営まれていないことが薄雲巻で明らかになる。本発表では、花散里が源氏との男女関係をどのように考えていたのか、花散里の心情描写に着目し、彼女の本心について明らかにしていきたいと考える。

なお、本稿における傍線は特別の断りがなければ、作成者が付与したものとする。

一 花散里と源氏の男女関係

本章における男女関係とは、特別の断りがなければ肉体関係を指すものとする。また、男女関係については源氏と女君との間のもの

にのみ着目したため、宇治十帖については取り扱わない。『源氏物語』中における源氏と主要な女君の男女関係については大きく分けて、

①男女関係が継続する場合（紫の上、明石の君）

②男女関係が全く生じない場合（朝顔の姫君、玉鬘）

③かつては男女関係があったが後になくなる場合（藤壺、空蝉、六条御息所、末摘花、朧月夜、花散里、女三の宮）

の三パターンである。（括弧内には各パターンに当てはまる主要な女君を記載している。）

③に含まれながらも異色なのが、花散里である。男女関係をはつきりと拒むわけではないものの源氏が近づくのをよしとしない態度をとる。しかし、二人の仲は決して冷やかなものではなく、花散里は六条院の夏の町の女主人として源氏の繁栄を支え、源氏側も夕霧や玉鬘の後見を依頼するなど③に含まれる他の女君とは異なる扱いをする。

二 花散里の心情描写

『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』¹⁾の検索機能を利用すると作中における花散里の全用例数は五一例であり、そのうち心情描写は四例であった。本稿では、源氏との関係について花散里の心情が窺えると思われる二例を取り上げる。

花散里と源氏の関係については、「内裏わたりにてはかなうほのめきたまひし」(花散里)という記述から、花散里巻以前から二人が男女関係にあったことが予測できる。また、「かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ」(須磨)という記述から、須磨退居前の時点で源氏の花散里の元への訪れが稀になっていることが読者に明らかにされる。源氏との男女関係に関する花散里の心情が描写されるのが、薄雲巻において新春に花散里の暮らしぶりが記載される以下の場面である。²⁾

東の院の対の御方も、ありさまはこのまじう、あらまほしきさまに、さぶらふ人々、童べの姿などうちとけず、心づかひしつ
つ過ぎしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御いとまのひまなどには、ふとはひ渡りなどしたまへど、夜立ちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。ただ御心さまのおいらかに子めきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと、人参りつかうまつりて、別当どもも

こと怠らず、なかなか乱れたるところなくめやすき御ありさまなり。(薄雲 P.159 L.5)

「のどかなる御いとまのひまなどには、ふとはひ渡りなどしたまへど、夜立ちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。」という記述から、源氏が花散里の元に気軽に立ち寄ることはあっても、夜に泊まるということが少なかつたことが窺える。また、この源氏の訪れについて記述された後に、「かばかりの宿世なりける身にこそあらめ」という花散里の諦めの心情が描写されており、薄雲巻の時点で二人の男女関係が微かなものであったことが考えられる。更に、「思ひつつ」ではなく「思ひなしつつ」と描写されており、そう思おうとする花散里の意思のようなものが感じられる。沢田氏は右記の場面に
ついて、³⁾

『かばかりの御宿世なりける身にこそあらめ』と思ひなしつつ、
という自虐的ともいえる強力な自制心の働きの見過ごすことは
できない。「御心さまのおいらかにこめきて」は天賦のものかも知れないが、「思ひなしつつ」、ありがたきまで後やすく、のどかに物し給へば」は厳しい自制を基軸に意識的に選びとられたきわめて能動性の強い所為といわざるを得ない。彼女は与えられたものを受け取るのみの受動的な人形にのみ造型されているのではない。

と述べており、自制的に振る舞う花散里が描かれていることが分かる。沢田氏の論から、花散里が自分の本心としては諦めたくないも

の、自分の身の程がこの程度だと思おうとしていたことが考えられる。

その後、少女巻において源氏から夕霧の後見を任された花散里は夕霧と対面し、夕霧の視点から初めて花散里の不美人な容姿が明らかになる。その後、花散里は紫の上とともに六条院に移転し、北東に位置する夏の町に暮らすようになる。玉鬘巻では新たに玉鬘の世話を任され、花散里は玉鬘に優しく気を配りつつ共に暮らす。年が改まり、初音巻で源氏は六条院の女君たちの元へ新春の挨拶に向かい、花散里の容貌を目にする。螢巻において、五月五日には丑寅の町の馬場で騎射が行われた。その催しを終えた夜、花散里の元に源氏が宿泊する様子が以下の様に描かれる。

今はただおほかたの御むつびにて、御座なども異々にて大殿籠る。などでかく離れそめしぞと、殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやともそばみきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人伝に見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしとおぼしたる。

その駒もすさめぬ草と名に立てる汀のあやめ今日や引きつるとおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれとおぼしたり。

にほどりに影にならぶる若駒はいつかあやめに引き別るべきあいだちなき御ことどもなりや。「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と、たはぶれごとな

れど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をばゆづりきこえたまひて、御几帳引き隔てて大殿籠る。気近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れ果てきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。(螢 P.71 L.8)

源氏と花散里の男女関係が途絶えていることが明らかにされている一方で、「などでかく離れそめしぞと、殿は苦しがりたまふ」と記載されるように、花散里との関係がよそよしいものになってしまったことを源氏が心苦しく感じていることが窺える。二人の贈答では、花散里は「源氏に相手にされない自分の身を菖蒲と重ねて五日だから引き立ててくれた」と詠い、源氏は心惹かれる思いを感じている。一方で、花散里は「気近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れ」ており、源氏と共寝することが不釣り合いであると諦めている様子が窺える。

この薄雲巻と螢巻の場面について栗山氏は、ある転換が起きていると以下のように指摘する。

床離れという状況は「夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず(薄雲巻)」とあった如く、明らかに源氏自身もたらしめたものであった。ところがここにいたって突然「などでかく離れそめしぞ」と心苦しがりたり、「あながちにも(肉体関係を)聞こえたまはず」などと、あたかも花散里自身がそれを望み、その意を尊重して無理強いはないという源氏の「思いやり」が語られるのである。この齟齬は、そのように見たいという源

氏の願望に支配された視点と言え、そのように自らをも欺瞞化してしまふことで、光源氏・六条院世界の理想性が幻出されるものであることを示していると言える。

以上のように、源氏が要因となつて生じた床離れが、花散里が要因となつているかのように転換が生じていることが分かる。また、源氏がそう見たい、という思いがあるためにこの転換が起こつていくということも指摘されている。源氏が近づくことを良しとしない態度を花散里が見せるのは、そのような源氏の思いを察しているからではないだろうか。

花散里の察しの良さは、源氏と花散里が玉鬘の婿候補である兵部卿宮を批評する以下の場面で見受けられる。

大臣はこなたに大殿籠りぬ。物語など聞こえたまひて、「兵部卿の宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意けしきなど、よしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ、「御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかくをり過ぐさずわたりむつびきこえたまふと聞きはべれど、昔の内裏わたりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。いとよくこそ容貌などねびまさりたまひにけれ。帥の親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」とのたまへば、ふと見知りたまひにけりとおぼせど、ほほ多みて、なほあるを、よしともかけたまはず。

(螢 P.70 L.7)

源氏は兵部卿宮について、容貌や心配り、物腰などが優れていると言いつつも、「よしといへど、なほこそあれ」と話し、他の人々は褒めるが自分と比べればそれほどでもない、という思いを言外に表す。⁶⁾ その様子から、花散里は源氏の異母弟である帥親王より兵部卿宮は優れているが源氏にはとても及ばない、という判断を下す。その判断について、源氏は一目で人柄を見抜いてしまった、と感心をする。この描写から、花散里は源氏の思いを酌み取り、源氏の望むような行動ができる察しの良さを備えていたことが考えられる。また、この場面が先の螢巻の場面の直前に挿入されていることから、察しの良い花散里を念頭に置いたうえで読者は物語を読み進めていくため、源氏の意を酌んでの行動として扱うことができるのではないだろうか。

では、なぜ花散里は源氏の意を察し、自らの思いを自制して行動するのであるのか。森藤氏は、⁷⁾ 空蟬が源氏夫人と認知されないことを見抜いて、社会的認知を受ける伊予介夫人の座を選択したことを挙げ、以下の様に述べている。

右のような思考は、親なき後、「中の品」というしかない花散里の思考をも支えているものではなからうか。光源氏が須磨流離の間、ひっそりと生きた姉妹は、現実の不如意を充分に体験したはずである。

源氏の「心苦しき」人として、東院、六条院に据えられてのちも、終始「おいらか」に「つつまし」く生きる花散里は、「かばかりの宿世」と自得することにより、光源氏の東院・六条院

で生きる方途を択んだとみるべきだろう。

としており、花散里が源氏の元で生涯を送るために自制的に身の程をわきまえて振る舞ってきたことを指摘している。花散里は源氏の元で生涯を送ることを選択し、源氏の男女関係を望まない意を酌み、自ら床離れをしたかのように振る舞ったのではないだろうか。

三 花散里の本心

「かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ」(薄雲)という記述からは、自らの身の程がこの程度だと思ひ込もうとする心情、「気近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れ」(螢)からは、自らを源氏の傍に近づくのに不釣り合いな存在であると諦める心情が窺え、花散里が本心では源氏と男女関係が継続すること、源氏の訪れが増えることを望んでいたと考えることができる。しかし、源氏自身が花散里の元に通う頻度がかなり少ないことから窺えるように、源氏は男女関係の継続を花散里に対して望んでいるわけではない。そのため、花散里は自らの望みを諦めるとともに、源氏の意を察して行動しようと、自ら床離れをするかのように振る舞ったのではないかと思われる。また、これらの花散里の行動は、源氏の傍で生涯を送ることを花散里自身が選択したという意味の表れであるとも言えるのではないだろうか。

私はこの花散里の選択は作者である紫式部にとって、理想的なものであったのではないかと考える。『源氏物語』中で源氏に最も寵愛されたのは、紫の上であるが、女三の宮の降嫁によって晩年は出家を望むなど、幸せな最期とは言えない描かれ方がされている。作中

で最も紫式部に性格が近い女性は明石の君と言われている⁸⁾。その明石の君でさえ、娘である明石の姫君が女御となるまでは、自分の身分の低さに思い悩み、物思いの絶えない生活を送っている。両者に近い待遇を受けている愛人でありながらも、花散里が紫の上、明石の君両者以上に辛い思いをする場面は描かれていない。この二人の人生と比べて考えると、花散里はある種の諦めと自制をもって、女が誰もが経験する物思いから抜けることのできた女君と言えるのではないだろうか。

結び

花散里は作中の登場頻度は少なく、その性格も控えめな印象を受ける女君である。しかし、少ない描写の中にも一読しただけでは気づかない彼女の心情が隠されており、実は最初の印象である穏やかさや控えめさだけが彼女の性質ではないことに気づかされる。とすると些末な人物として扱われることの多い花散里であるが、気づかないだけで実は深みのある人物として描かれているようにも思われるのである。本稿では、あくまで源氏との男女関係における花散里の本心を垣間見たにすぎず、本心と花散里自身の性格・性質がどのように関わっているのかを詳細に言及するには及ばなかったため、今後の課題としたいと考える。

注

(1) 『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』(伊井春樹編、角川書店、1999-

10

(2) 以下『源氏物語』本文は『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』(伊井

春樹編、角川書店、1999-10) 所収のものを使用する。また、括弧内頁数は『新潮日本古典集成 源氏物語』のものを記載している。

(3) 沢田正子「花散里の君―虚心の愛―」(『源氏物語作中人物論集』森一郎編、勉誠社、1993-1)

(4) 参考『新潮日本古典集成 源氏物語 四』(石田穰二、清水好子校注、新潮社、1979-2-10)

(5) 栗山元子「玉鬢十帖における花散里の醜貌と床離れについて―その両義的作用―」(『平安朝文学研究』復刊 5号、1996-12)

(6) 参考『新潮日本古典集成 源氏物語 四』(石田穰二、清水好子校注、新潮社、1979-2-10)、『新日本古典文学大系 20 源氏物語 二』(柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎編、岩波書店、1994-1-20)、『新編日本古典文学全集 22 源氏物語③』(阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注、小学館、1995-12-1)

(7) 森藤侃子「光源氏と花散里―凡帳(1)の夫婦」(『人文学報』225号、1991-1)

(8) 注(3)の論文において、沢田氏は「源氏の女君たちのなかで作者の自画像に最も近いのが明石の君」と指摘している。

(すずき・ゆみこ／横浜国立大学教育人間科学部卒業生)